

声をあげよ

大津市で昨年10月、中学2年生の男子生徒が自殺した問題で、地元の教育委員会や中学校が厳しい批判に晒されています。

報道されている内容が事実であれば、教育委員会や学校のいじめに対する認識の甘さ、対応の拙劣さに言葉を失いますが、多くの子ども達がいじめに気付きながら、どうして最悪の事態を防げなかったのでしょうか。

「生徒がトイレでいじめられている」と別の生徒が学校側に伝えたにもかかわらず、その情報を受けた教師の側の認識が「けんかで負けていたようだ」というのでは、折角の情報を生かすことはもとより、最悪の事態を防ぐことが出来なかったのも当然といえるでしょう。そして、何よりも心配な事は、生徒達が学校を信頼しなくなるのではという事です。

ただ、同時に思う事は、情報の発信が一人ではなく、複数の生徒が声を上げたとしたらどうだったでしょうか。一人の声は小さいかもしれませんが、幾人もの人が声を上げればそれは学校を動かす大きな力になったのではないかと思います。

勿論、声を上げるという事は、もしかしたらその事によって、今度は自分がいじめの対象にされるかも知れませんが、とても勇気のいる事に違いありません。

しかし、教師といえども完ぺきではありませんから、いわなければ分からないという事も沢山あり、気が付いた誰かが声を上げなければ、事態は何も変わらないのです。

ジャーナリストの江川紹子さんは、自分のために声を上げてほしいと、次のように述べています。

「いじめを傍観するのも、いじめの一種。被害を出さないためにも、自分が何もしなかったことでしんどい思いをしないためにも、声を上げてほしい（7月16日付朝日新聞）。」

声を上げなければならないのは、いじめに気付いた人だけではありません。いじめられている本人が、勇気を奮って声を上げてほしいと思います。

中学生時代いじめを受けていたというボクシング元世界王者、内藤大助さんは「少しでも嫌な事があれば自分だけで抱え込むな。親でも先生でも相談したらいい。先生にチクったといわれたって、それはカッコ悪い事じゃない。あきらめちゃいけないんだ（7月14日付朝日新聞）」と述べていますが、そのとおり、決して諦めてはいけません。

私は、教育長になった2006年の11月、道内の子ども達に充てて発した「生き抜く勇気を」という一通のメッセージの事を今でも鮮明に覚えています。

生き抜く勇気を！

児童生徒の皆さんへ

もう死ぬのはやめてください。

新聞、テレビで子どもたちの自殺が報道されています。そんなニュースは、もう見たくありません。悲しすぎます。

自殺は、自分を殺すことです。死んだら決して生き返ることはないんですよ。私は、3年前に息子を亡くしました。突然のことでした。

親より先に子どもが死ぬことは、残された家族にとって、どんなに悲しいことかわかりますか？

そして、残された家族は、その悲しみを一生引きずっていかねばならないんです。その辛さがわかりますか？

死にたくなるような辛いことがあっても、もう、自殺なんてやめてください。家族を悲しませないでください。

辛いことがあったら、周りの人に相談する勇気をもってください。

お父さん、お母さん、先生、兄弟、友達、近所の人たちに。

誰でも良いですから、今の辛い気持ちを訴え続けてください。相談する勇気を出してください。

必ず相談に乗ってくれる人がいます。

電話で相談できる場所も用意してあります。

もう自殺なんて考えないで、生き抜く勇気をだしてください。

最後に、全ての児童生徒の皆さんに言いたいことがあります。

いじめは絶対に許されないことです。

あの時の一言、あの時のメール、あの時の自分の行動を、いま一度、自分の身に置き換えて考え直してみてください。

当時は、滝川市をはじめ全国各地で、いじめを苦しんで自殺するという事件が起こっており、また、学校などに自殺予告の手紙などが頻りに届けられるという深刻な状況にありました。

その後、いじめ問題については、行政も学校も様々な対策を講じてきているはずなのに、大津市でのいじめ問題への対応を見ると、行政や学校の体質が何も変わっていない、過去に学んでいないとしか感じられず、残念でなりません。

いじめの問題に対しては、行政も学校も、教師も保護者も、子ども達と関わる全ての者が、まずは「逃げない」「はぐらかさない」「隠さない」という姿勢を貫くことが、何よりも重要だと思っています。(塾頭 吉田 洋一)